

かな身回り品を持っただけで、寄るあてもないまま大連市へ四十キロの道のりを昼夜の別なく歩き続けた。

命からが大連に辿りついた難民は、伝手を求めてさまよい、漸く雨風を凌ぐ住宅を探した。しかしたちまちその日からの食にも窮し、収入を得る職にもあり付けず、果ては無けなしの身回り品を町で立売りして、どうにか命を保つ以外なす術がなかったのである。

幸か、不幸か妻は、かかる惨状の中で二十一年長男を分娩した。細々と高粱粥をすする身体からは、満足な母乳の出るはずもなく、ミルクを求める金もなく、毎夜空腹に泣く乳児を抱きしめ、身を切られる思いに、ともに泣き明かしたのであった。

#### 引き揚げ後の再出発

妻は幼児を守って二十二年二月、着のみ着のままそれでも無事故郷に帰ったが、その直後長男は不帰の旅路に旅立った。私は二十四年九月二日舞鶴の地を踏むことが出来たため、夫婦は再会することが叶ったのである。

ソ連抑留の永い引き揚げ者にとって、祖国の風は冷たく厳しかった。家財道具もない二人の家庭の再建は並大

抵ではなかった。就職の門は堅く閉ざされ、暗い気持ちの毎日がいつ果てるともなく続いた。

やがて数か月後、知人の骨折りで私は町役場の臨時職員に、妻は農協の売店に雇傭された時は、まさに暗夜に灯火を得た如く、夫婦手を執り合って欽喜雀躍の思いをしたものである。月の手当を受けるたびに、先ず鍋釜・食器・食卓から買い求め、下着・衣類を整えて行くのであったが、それでも若さと健康に恵まれた、再生への希望が徐々に増幅されていったのである。

薄給ながら少しずつ生活に安定をもたらした二十五年、二十七年と続いて女兒が誕生して、時にはわが家に笑い声が起こるまでに至ったのは、優しく気丈な妻の努力と愛情が、常にその源をなしていたものであった。

#### シベリアから復員までの労苦

愛知県 板倉博明

私は、十四歳の昭和十六年に父に連れられて、満州国

開拓団員の家族として、日本を出発した。そこは、三江省通河県大古洞開拓団であった。広い広い荒野で、冷たい秋風が枯草を淋しくなびかせていた。遠くには開拓団の部落が黒く点在して見えた。日本で想像していた、花咲く楽土の新天地などでは全くなかった。

遠い道を歩いて自分の落ちつき先の土盛りの塀に囲まれた部落に着いた。粗末な服装をした開拓団の人達が懐かしそうに迎えてくれた。私の家は、草屋根の土泥の家で、室内には日本の古新聞が天井と壁に貼ってあった。

食事は米がなく、コウリヤンなどの雑穀ばかりで、初めは全然食べることができなかった。

私が開拓団の小学校に入學して間もなく、昭和十六年十二月八日の太平洋戦争が始まった。昭和十八年に小学校を卒業し、開拓農業に従事しながら青年学校に入った。軍事訓練ばかりやっていた。やがて、太平洋戦争は日本軍の玉砕が伝えられ、戦争は敗色が濃くなって行った。

部落には、軍の召集令状が来るようになって、老人や女子供ばかりになっていった。昭和二十年八月十日、開拓団に残っていた男に全員一斉の動員令が来た。十七歳

の私は、父と一緒に遠い道のりを無言のまま集結地に歩いた。集結地に到達すると、大勢の開拓団員が集まっていた。そこで父と別れたのがこの世の最期となったのだ。

松花江の水車船に乗せられ、船中一泊し翌日ジャムスに着いた。町に入るともう人影はなかった。駅に着くと動員された他県の開拓団員や軍人が集結し混雑していた。ボタンコウに入隊するはずだったが、もうすでにソ連軍の進撃により入隊することができず、ジャムスの守備隊へ入隊することになった。守備隊兵舎に着くと関東軍は撤退したあとで兵舎はからっぽであった。ここで部隊は編成をして、私服から軍服に着替え、古い三八歩兵銃を渡された。しかし、実弾は一発もなかった。

ここで一泊をして翌朝は部隊の撤退準備となった。約千人の兵士が兵舎前広場に整列して部隊長の訓辞を受けた。部隊の使命は、日本人難民を無事祖国に送還することであった。中隊はそれぞれの任務を持って、軍の施設や町の家に火をつける係、列車に食糧の積み込みをする係、駅の警備をする係となってそれぞれ町へ向かった。私達は、駅の警備をする係となった。ここには日本人難

民で混雑していた。これらの人達を列車に乗せる任務を遂行した。

この任務を終え駅に集結した兵士達は、夜空に赤く燃えさかるジャムスの町を後にして列車でハルピンに向かった。行く先々で破壊された鉄道を修理しながら幾日もかかって進んだ。途中の駅で終戦を知った。

スイカの駅に着くともうこれより先に行けず、部隊はここで下車することになった。各地から出て来た日本人避難民は飛行場の兵舎や格納庫にひしめいていた。この難民の女や子供は食糧を入手することもできず、飢えと病気で死んでいった。空き地に難民の死者を埋葬した土盛りりの山が、日毎に多くなっていった。

ソ連軍の命令により日本軍は飛行場に整列させられ、銃や軍力を滑走路に並べて降伏をした。私達は日本軍捕虜として収容所に入れられた。気にかけていた日本人難民のことは全くわからなくなった。

私達は、ソ連軍の命令によりソ連に送る占領物資の積み込み作業をさせられた。殆どが穀物、石炭、衣類などであった。本当になさけないことである。日本人の貴重

な財産がむざむざと、私達の手で積み込まれているのである。

やがて、日本軍人の個人のそれぞれの職業調査があった。先ず、兵歴調査があり、憲兵特務機兵、その他の兵歴が確認された。特殊技能を持っている者など詳しく調べ上げられた。入隊以前の職歴も調べられた。ここで、部隊長などが連れ出されてしまった。

間もなく部隊員は、貨物列車に監禁されて、黒河からソ連領に入り、幾日もかかってクラスノヤルスクの収容所へ連れて行かれた。シベリヤの冬はものすごく寒く、零下四十度にもなった。私達の服装はぼろぼろで汚れ、栄養失調と空腹で強制労働が毎日続けられた。この姿は想像を絶するものであった。多くの同胞がシベリヤの地で逝った。

私は、命からがら昭和二十三年の秋に故郷へ復員することができた。満州で別れた家族は、実家にもどった兄弟を除いて死亡してしまった。苦勞を共にした両親との別れのかなしさは永遠に忘れられない。

戦争というものは絶対にしてはならない。勝者も敗者

も不幸であることをしみじみ体験した。現在私は、平和な日々を感謝しながら生きている。苦労を重ねた長い長い過ぎし日々を追想した。

## 終戦後の出来事

静岡県 曾根 碩 二

昭和二十年八月、終戦の日から旬日を過ぎた或る日、華北交通（株）天津鉄路局で管理していた北寧公園内の池のほとりの芦原で私と同じ天津站到勤していた内田と村松の二人が何者かと争った後殺された事件があった。

北寧公園も他の施設と同様、日本が敗戦した後は中国政府の管理に移されたのだけれども実際は無に等しいもので中国人、日本人の別なく池の鯉を釣りに行っていた模様で彼等も釣りに行つての出来事である。

私は昭和十二年七月天津東站が八路軍に襲撃された時救援の為満鉄大石橋駅から出張で来てそのまま華北交通へ在勤となったもので構内副站长としては最古参者であっ

た関係で二人の火葬、葬式は主になつて行つたが永い間の戦争相手の国の国内で戦勝国民として指導してきた日本人に対する感情は悪いのが当然だろう、此の時中国人からは勿論日本人同胞からも嘗てない嫌な思いを受けた。亡くなつた二人の遺体と両家の家族を数人の職員に手伝つてもらいトラックに載せて郊外の火葬場へ行く、辻々に立っている中国人巡警の検問に止められ、その都度幾ばくかの金銭を渡さなければ通してくれない、お寺さんも宗派が云々と言つて仲々返事をもらえない、三拝九拝して西本願寺へお願いして葬式も済ますことが出来た。

此の事件があつてから日本領事館警察の宮崎刑事が毎日駅へ聞き込みに来て私も問われる事については誠意をもって答えていた、然し数日後の十七時頃「もう少し詳しく聞きたいことがあるから本署まで来て下さい」と云い構内主任も「ご苦勞だが頼むよ」と云うことで領事館まで刑事と雑談しながら歩いた。

さて、領事館へ着き警察署の取調べ室へ入ると他の刑事が片手に剣道の竹刀を持って来て、いきなり「もう調べはついているんだ南貨廠で盗難に会つた綿布を買つた